

## 乳牛の分娩後早期の定時人工授精は季節によって使い分けを!!

分娩後早期における定時人工授精（TAI）は、乳牛の繁殖成績向上に効果的な技術であるが、分娩から授精までに暑熱の影響を受けた牛では受胎率が低くなるため、牛の状態から実施の適否を判断する必要がある。一方、暑熱の影響のない牛での受胎率は高く、全頭一律に実施することで繁殖成績を向上できる。

### 内容

2019年2月号にて、ホルモン製剤により排卵と人工授精のタイミングを合わせるTAIを分娩後早期から実施することで、乳牛の繁殖性の向上につながることを報告した。本報告では、試験頭数を増やし、TAIの受胎性に及ぼす暑熱の影響を調べた。

淡路農業技術センターで飼養する乳牛41頭（初産17頭、2産以上24頭）に対して、分娩後早期である74-80日目にOvsynch+CIDR法（図1）によるTAIを実施した。供試牛を暑熱期（7-9月）に分娩した、又はTAIを実施した暑熱感作群と、それ以外の非感作群に区分し、各群の受胎率及び受胎性に影響する要因を調査した。

暑熱感作群のTAIの受胎率は22.2%（4/18）と

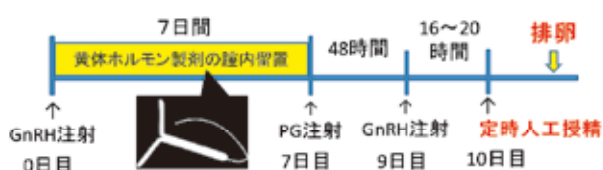


図1 Ovsynch+CIDR法の概要

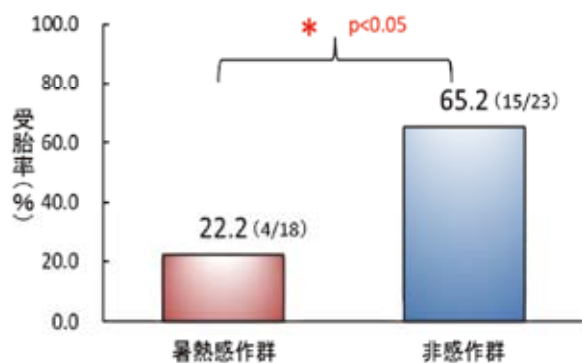


図2 分娩後早期TAIの受胎率の比較

低かったものの、非感作群では65.2%（15/23）と良好な成績が得られた（図2）。受胎牛と不受胎牛の各種成績を比較したところ、暑熱感作群では、受胎牛の飼料摂取量が不受胎牛に比べ分娩後4-6週で有意に多く（図3）、栄養状態を示す血液成分値も良好であった。一方、非感作群では飼料摂取量や血液成分等に受胎牛と不受胎牛で大きな差はなかった。

これらのことから、分娩後早期のTAIは、春～夏に分娩し、暑熱の影響を受ける牛に実施する際は、分娩後の食欲が旺盛で状態の良い牛に、秋～冬に分娩した牛では、牛を選ばず全頭に実施することで、効率的に繁殖成績を向上させることができると考えられた。

### 今後の方針

複数の牛群において分娩後早期TAIの受胎性を比較し、飼養管理の違いに応じたTAIの有効な活用法を検証する。

石川 翔（淡路畜産部）

（問い合わせ先 電話：0799-42-4883）

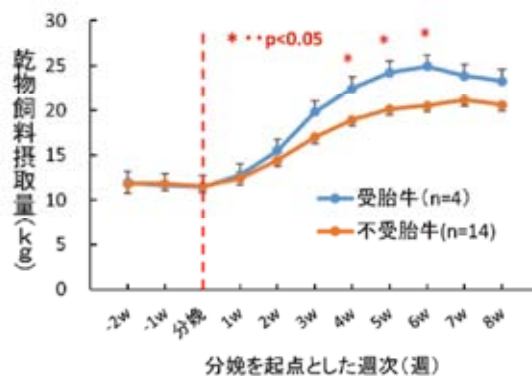


図3 暑熱感作群の飼料摂取量